

災害と苦闘した文人たち

東京新聞(中日新聞東京本社)

編集委員 田中 哲男

墨田区は昔から多くの文人が名作を生み出した舞台として知られるが、一方で大災害に悩まされた町でもあった。そんな災害と苦闘した文人たちの壮絶な生涯について記してみたい。

隅田公園の枕橋近くに一柱の碑が立っている。天才俳人といわれた富田木歩が関東大震災で悲運の最期を遂げた場所だ。

木歩は明治30年(1897)向島小梅町で生まれた。生涯の友・新井聲風編「木歩句集」によると、2歳の時に病気で両足の自由を失い、多難な人生が始まる。やがて極貧の一家を支えるため姉妹は花街に身を沈め、木歩も奉公に出るが、いじめに耐えきれず店をやめる。このころから木歩の心に俳句への情熱が芽生えていく。幼い頃から苦悩を背負い、学校にも行けない木歩には俳句こそが心の思いを叫べる唯一の道だったのだ。臼田亜浪に師事し天才・木歩の深遠な世界が開いていく。

猛火に包まれた 若き天才俳人

木歩の句は切なくて鬼気迫る情念を感じさせ、人の心を揺さぶった。家族が次々胸を患い、木歩も病んでかつ血するが、隣の娘や女弟子に密やかに恋もして句作に思いを注ぎ込む。その作は生涯二千句といわれる。木歩とは、自分の足で歩ける

ようにと作った木の足のことで、その願いは夢に終わった。木歩文集にある。「哀れ我が歩みたしの一心にて作りし木の足も今は半ばあきらめて裏垣の枸杞茂る中に淋しく…」

大正12年9月1日、運命の日がやって来た。関東大震災。動けぬ木歩を心配して駆けつけた聲風は木歩を背負い、群衆をかき分けて隅田公園へ逃げるが渦巻く猛火に包まれる。二人は万感の思いを込めて抱き合うと聲風は隅田川に飛び込み、木歩は猛火の中に消えていく。時に26歳。苦悩と波乱の生涯だった。聲風の心には激しい自責の念が渦巻いたことだろう。

被災文人はほかにも多い。名作「風立ちぬ」の堀辰雄は向島で両親と逃げる途中に炎に巻かれ、隅田川に落ちるが奇跡的に一銭蒸気に救われる。だが母は二度と戻らなかつた。また無名だった作家佐多稲子も曳舟の家を地震で失っている。「キヤラメル工場から」で文壇デビューする5年前、絶望の日々を送っていたところだった。幸田露伴もまた寺島村で被災し、翌年小石川へと移っていったのである。4万人が亡くなった本所被服廠跡の惨状に深い衝撃を受けた画家もいた。意外にも大正ロマンを描いた竹久夢二である。当時39歳。大震災直後から東京新聞の前身「都新聞」に「東京災難畫信」という絵入りルポを開

始。大反響を呼んでいく。

「被服廠はまさに死体の海だった。子を抱きしめて死んだ女は哀れであり、血気の男が死と戦った姿は痛ましく、どうしても描く気になれなかつた。」

だに付された幾万もの犠牲者、鎮魂の煙、深い悲しみに泣き崩れる人々…彼は呆然とみつめるだけだったという。

大震災の悲惨な光景は夢二の心に無常観の陰を落とし、今までの美人画風とは対局の深遠な苦悩を漂わす人間が初めて描かれていく。そして、その後の人生もまた劇的に変わっていくのだ。連載21回。最後は絶望の思いでこう締めくくる。「酒だ女だ、いつ死ぬか人間に何がわかる。ああ東京はバビロンの昔に還ってしまった」

夢二は胸を冒され、昭和9年9月1日、信州の療養所で孤独のうちに旅立つ。50歳だった。

襲う濁流に耐え 必死に牛を守る

名作「野菊の墓」の作者で、歌人でもあった伊藤左千夫も災害に苦闘した一人である。

水害史に残る大洪水が東京下町を襲ったのは明治43年夏。当時左千夫は本所区茅場町で牛を飼って家族を養い、歌に情熱を注いでいた。その飼育場に不気味な音をたてて迫る濁流。闇夜に響く牛の鳴き叫ぶ声…

自著「水害雑録」によると、家族を支える20頭の乳牛を守るため彼はおびえ暴れる牛を引っ張り、濁流に胸まで浸かり、両国を目指して決死の避難を始める。牛乳缶を背負い、ヘソも膝も丸出しの姿で。「ああ何と情けない姿。こうして死ぬまで苦勞するの」と嘆きながら。

働けど尽きぬ貧困、幼子を失った悲しみ、相次ぐ水害。左千夫の珠玉の作品の陰にはそうした苦悩と災害との戦いがあったのだ。享年50。かつて牛を飼った錦糸町駅前には歌碑があつて左千夫の往時を忍ばせる。(平成23年11月26日、すみだ地域学セミナー講演より)



明治43年8月大洪水
本所亀沢町(現清澄通り付近)
付近(墨田区立緑図書館所蔵)